

今後の展望

谷戸沢処分場の活動計画では、最終処分場として適正な維持管理を行うとともに、動植物や生育生息環境の保全・創出を進め「里山的自然環境」を再生し、一般市民が自然と触れ合い親しむことのできる場を確保することを目標としています。

谷戸沢処分場には、約14年間にわたって埋め立てられた廃棄物が地中に今も存在しているため、閉鎖管理をしており、誰でも自由に立ち入ることができる場所ではありません。今後も当組合は地域の方々のご理解とご協力のもと、谷戸沢処分場の適切な維持管理を行うとともに、生物多様性を維持、増進する活動に継続して取り組んでいきます。また、様々な見学会を通して、廃棄物処理の経過や処分場の現状等を知るとともに、自然の大切さを学んでいただく機会を多摩地域の皆様に引き続き提供してまいります。

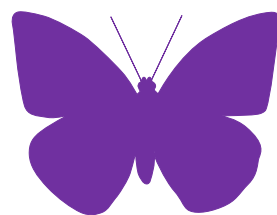
自然共生サイトとしての今後の取組

当組合では、これからも指標種4種を軸とした保全を進め、「里山的自然環境」の再生と自然共生サイトの活動を継続することにより、地域の生物多様性の維持・向上に貢献してまいります。

【指標種4種を軸とした保全計画】

オオムラサキが棲みつづける“里山づくり”

- ・エノキの保全、越冬準備の徹底
- ・ナラ枯れ調査、対策の実施
- ・適切な除伐や萌芽更新による明るい森づくり



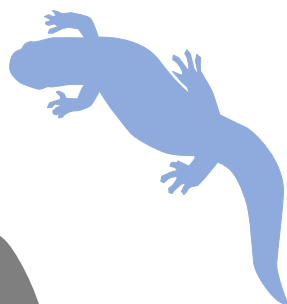
カヤネズミが棲みつづける“草地づくり”

- ・ススキの生育を妨げる“クズ”と“アレチウリ”の駆除
- ・ススキ草地の刈残しエリアや草刈り順序の設定
- ・刈残しエリアのカヤネズミ生息状況のモニタリング



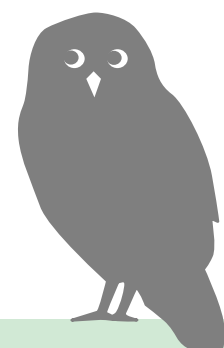
トウキョウサンショウウオが棲みつづける“水辺づくり”

- ・繁殖地のモニタリングの継続
- ・水環境のモニタリングの実施
- ・捕食者“アライグマ”対策の継続



フクロウが棲みつづける“豊かな森づくり”

- ・フクロウの生活を支える水辺の保全
- ・谷戸沢のフクロウの生態調査
- ・シカの防除による森林の保全



詳細ページへのリンク

谷戸沢処分場の活動計画や活動内容、生物多様性の価値などについて詳しくご覧になりたい方は、環境省の「自然共生サイト検索ナビ」をご覧ください。最新の活動情報も、こちらからチェックできます。

■生物多様性「見える化マップ」自然共生サイト検索ナビ>谷戸沢処分場のページ

https://www.biodiversitymap.env.go.jp/initiatives?site_no=920251200031



■東京たま広域資源循環組合ホームページ

<https://www.tama-junkankumiai.com/>



東京たま広域資源循環組合

〒190-0181 東京都西多摩郡日の出町大久野7642
TEL:042-597-5581 FAX:042-597-7886
URL <https://www.tama-junkankumiai.com/>

谷戸沢処分場が「自然共生サイト」の認定を取得 ～最終処分場から始まるネイチャーポジティブ～



谷戸沢処分場の取組が「自然共生サイト」に認定されました

谷戸沢処分場は、多摩地域25市1町のごみの最終処分場として、林地を切り開いて埋立地が造成され、昭和59年から平成10年4月まで埋立てを行ってきました。埋立て終了後も適切な維持管理を継続して行うとともに、ごみの埋立てにより失われた里山的自然環境の再生のため、清流復活用貯水池やビオトープを設置するなど、生態系を豊かにする取組を続けた結果、現在では、豊かな里山の生態系が再生しています。

これらの取組により、生物多様性が維持されていること等が評価され、令和7年9月16日に内陸の管理型最終処分場では初めて「自然共生サイト」に認定されました。

自然共生サイトとは？

「自然共生サイト」とは、生物多様性の損失を止め、反転させるネイチャーポジティブ実現に向けた取組として、「地域生物多様性増進法」に基づき、企業の森や里地里山、都市の緑地など民間の取組等による生物多様性を増進する活動計画を環境省が認定する制度です。認定された活動の実施区域を「自然共生サイト」と呼びます。



谷戸沢処分場の活動計画は、調査、保全、周知からなっています

調査

動植物調査

谷戸沢処分場に生育生息する動植物の状況を調査※

- ※生態モニタリング調査の継続
- ・植物
- ・昆虫
- ・両生類・爬虫類・哺乳類
- ・鳥類
- ・水生生物

保全

生育・生息環境の整備

定期的な草刈り
外来種の防除
動物の移動経路確保
里山の植物や希少植物の保全
オオムラサキ越冬環境の整備
カヤネズミ保全の草刈り区域設定
トウキョウサンショウウオ産卵地整備
鳥類（フクロウ）巣箱の設置

周知

自然観察会、見学会、広報活動

一般市民（多摩地域）を対象としたオオムラサキに関するイベント
夏の草原を楽しむイベント
秋の紅葉を楽しむイベント
広報誌「たまエコニュース」の発行

谷戸沢処分場の活動計画の目標、認められた4つの価値と個別目標をご紹介します

【計画の目標】

最終処分場として適正な維持管理を行うとともに、動植物や生育生息環境の保全・創出を進め「里山的自然環境」を再生し、一般市民が自然と触れ合い親しむことのできる場を確保する。

価値1. 里地里山の生態系

里地里山といった二次的な自然環境に特徴的な生態系が存する場

【目標】

- 定期的な草刈りによってカヤネズミ、ホオジロが生息する草原を維持



周辺のコナラ林などの樹林、埋立跡地のススキ草地、清流復活用貯水池や水路を含めた水辺環境がまとまっていることにより、これらの里山的環境を好む動植物が多く確認されています。

価値2. 生態系サービスの提供

生態系サービス提供の場であって、在来種を中心とした多様な動植物種からなる健全な生態系が存する場

【目標】

- 里山に特徴的な在来種の保護増殖
- 外来生物の防除
- 最終処分場に再生した自然と生き物に触れ、人の生活と自然環境保全の両立について考える機会の提供



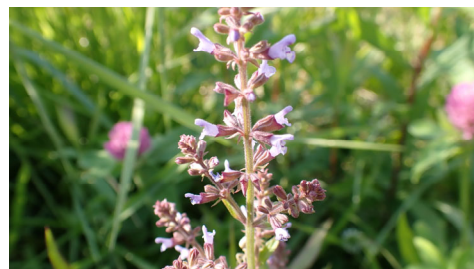
樹林と草地を行き来するタヌキなど、里山の在来種が多く暮らしています。多摩地域の方々を対象とした見学会では、日の出町の豊かな自然を実感し里山の生き物を観察できる機会を提供しています。

価値3. 希少な動植物の生息生育

希少な動植物種が生息生育している場あるいは生息生育している可能性が高い場

【目標】

- 希少な植物種（絶滅危惧種等）の生育環境を維持し、保護増殖
- 良好な里山の指標種4種（トウキョウサンショウウオ、フクロウ、カヤネズミ、オオムラサキ）の生息環境を維持



里山の生き物を中心に、100種以上の絶滅危惧種が確認されています。昔からこの地で生息生育してきた種のほか、里山的自然環境の再生にともない戻ってきた種、新たに入ってきた種も含まれます。

価値4. 動物の生活史に重要な場

越冬、休息、繁殖、採餌、移動（渡り）など、動物の生活史にとって重要な場

【目標】

- 移動能力の低い種の障壁を除去し、産卵場などへの移動経路を確保
- 鳥類の巣箱を整備
- 閉鎖管理による動物が休息できる環境維持

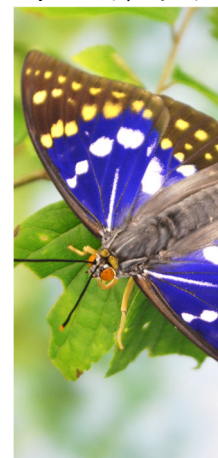


水辺にはトウキョウサンショウウオ、ハイクボタルなどが繁殖し、ススキ草地にはカヤネズミ、ホオジロなどが繁殖しています。周辺には少なくなったこれらの環境が谷戸沢処分場では維持されています。

谷戸沢処分場の指標種をご紹介します

処分場内に動植物が暮らすことができる里山的自然環境を再生するために、これまでに施設の維持管理などにおいて、様々な取組をしてきました。その結果、谷戸沢処分場には多くの動植物が戻り、里山的自然環境の生態系を構成するようになりました。

当組合では、これら多くの動植物の中から里山を代表する生き物であるオオムラサキ、カヤネズミ、トウキョウサンショウウオ、フクロウの4種を指標とし、保全を行っています。



オオムラサキ (*Sasakia charonda charonda*)

環境省：準絶滅危惧

東京都：準絶滅危惧

オオムラサキは里山を代表する大型で華麗な蝶であり、北海道から九州まで国内に広く分布しています。このことから、昭和32(1957)年に日本昆虫学会により、「国蝶」に選ばれました。しかし、現在ではオオムラサキが生息できる樹林環境が衰退し、生息数が減少しています。谷戸沢処分場では、埋立てに伴い一時期見られなくなりましたが、埋立後は自然の再生に伴って再び生息が確認されようになりました。このことは、里山の生き物が生息できる環境が整ったことの証となるため、里山的樹林環境の指標種としています。

カヤネズミ (*Micromys minutus*)

東京都：絶滅危惧Ⅱ類

カヤネズミはススキ草地に生息する国内最小のネズミです。ススキやオギなど草丈の高いイネ科の植物をまとめてカヤ(茅)と呼び、茅葺き屋根が利用されていた時代には、集落の近くにカヤ場が存在していました。現在ではそのような草地環境が各地で減少したことから、カヤネズミの生息数が減少しています。谷戸沢処分場には、埋立地に形成された広大なススキ草地が広がっています。その中に球巣を作り生活するカヤネズミは、ススキ草地を代表する動物であることから、里山的草地環境の指標種としています。



トウキョウサンショウウオ (*Hynobius tokyoensis*)

環境省：絶滅危惧ⅠB類

東京都：絶滅危惧ⅠB類

種の保存法：特定第二種国内希少野生動植物種

日の出町：町指定天然記念物

トウキョウサンショウウオは水辺のある樹林に生息する両生類です。普段は樹林で暮らし、繁殖期には水辺に集まり産卵する生態をもつことから、本種の生息には、樹林と水辺の二つの環境を併せ持つ場所が必要です。しかし、宅地開発などにより生息地が減少・消失し、生息数が減少しています。サンショウウオ類は水質の悪化などの僅かな環境の変化に敏感なため、良好な水辺環境の指標種としています。

フクロウ (*Strix uralensis*)

東京都：絶滅危惧Ⅱ類

フクロウは里山をはじめとした樹林に生息する猛禽類です。本種が生きていくためには、繁殖に利用する樹洞や、餌資源となるネズミや小鳥などの小動物が豊富な環境が必要です。しかし、現在ではフクロウの生活を支えることのできる環境が減り、生息数が減少しています。フクロウは谷戸沢処分場をとりまく生態系において頂点に位置する生き物のひとつと捉えられるため、里山的自然環境の生態系の指標としています。

